

人間の 条件

魔法少女リリカルなのはA's
クロノ×フェイト 18禁小説本

PARALLEL ACT

人間の条件

目次

| | | |
|------|-------|----|
| 第1章 | | 5 |
| 第2章 | | 9 |
| 第3章 | | 19 |
| あとがき | | 37 |

あらすじ

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

1

性教育の授業を受けたフェイト達。フェイトは初めての知識に戸惑う。

2

男性器を生まれてから一度も見たことがないフェイト、クロノに頼んで性器を見せ合いつこする。

3

魔導書を借りにクロノの部屋に入ったフェイト。そこでエロ本を見し、読み耽ってしまふ。それをクロノに見つけたフェイトはとんでもない行動に……

第1章

1

フェイト達が聖祥小学校四年生に無事進級して数ヶ月。四年生の勉強にも慣れてきた頃、女子は視聴覚教室Aに、男子は視聴覚教室Bに分かれる授業があった。

フェイトとなのは何が始まるのか楽しみにして、並んで席に着いた。周りを見ると、何人かの女子はひそひそ話をしている。すずかはこれからどんな話が始まるのを知っているのか、にこにこしている。アニサは相変わらずやる気なさそう。

「ねえ、すずか。これから何があるのか知ってるの?」

「それはね、とても大切な事よ」

「……?」

すずかは教えてくれない。アニサも教えてくれないさうだし、なのは何が始まるのか知らないようだ。

フェイトが何が始まるのか悩んでいた時、先生が入って

2

きた。クラスの担任の先生だけでなく、保険の先生も一緒だ。保険の先生が入ってきた瞬間、教室内に黄色い声が発生した。

「皆さんお静かに。これから、とても大切な授業をします」

放課後、フェイトとなのは、アリサとすずかと、いつもの面子で語らっている。フェイトは今日の授業の後、ぼくっとしているのが抜けていない。

「フェイトちゃん、どうしたの? ぼくっとして」

「今日の授業、恥ずかしかった……」

フェイトは顔を赤らめ、ちよつとうつむいて答える。

「でも、とても大切な事よ。私達にも初潮が来て、将来お母さんになるんだから」

授業を受ける前から知識があったのか、すずかは恥ずかしがることなく優しく諭す。

「お母さんになる……」

フェイトは少し上向いて呟いた。

「私も、お母さんになれるのかな?」

「そりゃ、Hして、子供が出来ればなるわよ?」

アリサが平然と答える。直球な言い方に、なのはは飲ん

でいたジューズを少し吹き出した。

「Hって?」

「セックスとか、性交とか。ズバツと言ったらそう言う事」

「へえ、ずずか物知りだね」

(このくらい皆知ってるって)

「フェイトも、パパとママがセックスしたから生まれてきたんでしょ」

「!!」

なのはは焦った。魔法の事とか、フェイトが異次元出身である事は皆にも話してある。しかし、フェイトがプレシア・テストロツサによって作られた人造生命体であって、普通の人間のように両親がいないとか、培養槽から生まれてきたと言う出生の秘密までは話していない。

「え、えと、昨日のドラマの事なんだけど…」

なのははこの話題を変えようとするが、その目論見はあっさりとは無視された。

「セックスってどんなの? 授業で『精子が卵子にくっつけば』って言ってたけど、どうやってくっつけるのかよく分からなかった」

(よ、良かった。フェイトちゃん、もう気にしてないのかな?)

本人さえ気にしていないなら、わざわざ話題を反らす必

要はない。

「ペニスを膣に挿入して、子宮の中に精子を射精するの。」

そうしたら、精子が卵子の所まで泳いで行くから」

「ペニスを膣に挿入……?」

言葉では単純そんな行為に聞こえるが、イメージが湧かない。どうやって挿入するんだろう?

「まだ未だ分からない? 男の子のお股またに生えているペニスを、女の子のお股にくっつけて、膣に入れるの」

「えっ!?!」

段々と恥ずかしいと言う感情が生まれてきて、顔が火照ほってくるのが分かる。そして、行為の非日常性から頭が段々と混乱してくる。お股とお股をくっつけるって……

「そうすると、お互い段々気持ちが悪くなって来て、一番気持ちが悪くなった時に射精するんだって。お姉ちゃんが言ってた」

「えっ!?!」

一同がずか振り向く。

「ねえ、それって、実体験?」

「うん」

「それって、まさか、うちのお兄ちゃんと忍さんがって事?」

「うん」

「気持ち、良いの? どんな風に?」

「口では説明できないって。それに、『彼と一体になってる』って感じがして嬉しいって言った」

「へえ……」

「そりゃ、ぴったりと身体をくっつけないといけないしね」

フェイトは男子と身体を密着させている様子、特に股間を密着させている状態を想像する。恥ずかしくなって、段々と思考が飛んで行きそうさ。

「あ、でも最初は痛かったって言ってたよ」

「気持ちいいんじゃないの？」

「処女膜つての膣の入り口にあつて、初めてペニスを挿入すると破れるんだって。それが破れると血も出て痛いって」

「へえ」

皆はずずかの進んだ知識に感心し、羨望の眼差しで見つめる。

「それに、恭也さんのペニス大きかったから、膣が裂けるかと思つたって」

「お兄ちゃんの大きいんだ」

なのはお風呂に一緒に入った時に見てはいるけど、他に知っているのは父士郎の物くらい。遺伝してるので、大きさは同じくらい。他人の大きさまでは知らない。

「ペニスって、そんなに大きい？」

フェイトが、少しおどおどしながら訊いた。

「フェイトちゃんって、ペニス見た事無いの？」

「うん」

「一度も？」

「誰のも？」

「うん。皆はあるの？」

「お父さんとお風呂に入った時とか… あ…」

フェイトの詳しい出生までは知らなくても、父親がいな事くらいは知っている。ただ、死別したぐらいに捉えられていた。

「いいよ、気にしなくて」

「でも、今はクロノさんと同居してるんでしょう？ お風呂上がりとか遇わない？」

「ううん、全然。脱衣所で着替えるし」

「漫画とかで見た事無い？」

「私、漫画読まないから」

「ううん。じゃ、見せて貰えば？」

「ええっ!？」

一同驚いてアリサを見る。

「これも勉強よ。大事な事だから知つとかなくちゃ」

「で、でも、形だけならビデオで出てきたから……」

「あんなイラストや断面図じゃ全然駄目よ」

「そうね、やっぱり本物を見ておいた方が良いわね」

「すずかも同意し出した。少し目が笑ってる。楽しんでる。楽しんでるよ皆。」

「ね、なのはも見といた方が良さと思うでしょ」

「う、うん……」

「決まり。フェイトは今日家に帰ったら、クロノ君にペニスを見せてくれるように頼む！」

「えええ……！」

「返事は!？」

「はい……」

フェイトは、その場の雰囲気と迫力に負けて同意した。

3

アリサやすずかと別れた後、家の方向が同じフェイトとなのはが自宅に向かって歩いてる。

「とんでもない事になっちゃった……」

「アリサちゃんもすずかちゃんも、冗談で言ってるんだから本当に頼まなくて良いよ」

「それでも、明日絶対に『どつして見せて貰わなかったのか』って言われるよ」

「あはは、そっだね」

アリサちゃんなら追求する。それにはなのはも同意した。

「ペニスかあ……ねえ、なのは。女子には膣って穴が開いてるんだよね」

「うん、そう言ってた」

「私にも開いてるのかな？」

「開いてるんじゃない？ どつして？」

「だって私普通の人間じゃないし」

(やっぱり気にしてた〜!!)

なのはは心の中で叫んだ。普段平気なそぶりしてるけど、やっぱり吹っ切れてないんだ。

「大丈夫だよ！ フェイトちゃんはちゃんとした人間だよ！膣だってちゃんとあるよ!!」

「なのは……」

フェイトはなのはの言葉に胸が熱くなる。しかし、その感動は周囲の視線で打ち消された。辺りの通行人が二人を見ている。公道で「膣」なんて叫んだから当然だ。

「あ……」

二人は一目散にその場から逃げ出した。

第2章

1

「ただいま」

フェイトは帰宅して挨拶をするが、返事はない。仕事があるリンディ提督やクロノに比べ、小学生であるフェイトの帰りが早いのは当然だった。

自分の部屋に入ると、鞆を置いて私服に着替える。

暫く考え込むと、机の上に置いてある鏡を手に取り、ベッドに腰掛ける。ごくりと唾を呑むと立ち上がり、スカートの下のパンツを掴んでずり下げる。ベッドの端まで行って、壁に背を預けると足を広げる。

自分の秘部を見る好奇心と興奮から、心臓の鼓動が強く、速くなる。恥ずかしさと背徳感から頬が火照る^{ほてる}。

鏡を足の間を持って行き、恐る恐る自分の局部を覗き込んだ。

ぶつくりとした大陰唇の間に、ピンク色の部品^{パーツ}が並んで

いる。まだ幼いフェイトの局部は、大人のそれと違って小陰唇も小さく細い。

(あれ?)

フェイトは鏡を局部に近づけて、目を凝らす。

(穴? どこ?)

鏡を持っていない方の手で大陰唇を広げてみるが、穴が見あたらない。本当はちゃんと膣穴が開いているのだが、処女膜で穴が小さくなっている上に、固く閉じられた膣肉の所為で奥行きがなくなり、一見穴とは言えない状態になっていた。

(え? どこ!?)

焦りで筋肉が緊張し、膣穴がさらに固く閉じる。焦らず、リラックスして筋肉が弛め^{ゆる}れば、穴が奥まで開いたのだろ

うが、その様な事は考えつかない。

(やっぱり、私……)

2

「ただいま」

クロノがハラウオン家に転移してくる。地球に住むようになつて暫く経つが、アースラ艦内や本局の、金属に囲ま

れた無機質な個室と違って壁紙や木を用いた部屋、さらに家族と同居する生活に安らぎを感じてきた。

自分の部屋で一旦着替えた後、リビングで新聞を読む。普段は管理局で仕事とはいえ、仮にも地球に住むのだから、地球の状況も把握しておかなければならない。それに地球の事を知っておかないと、フェイトやなのは達と話が合わない。

最も、そう思ってるのはクロノだけで、なのは達は新聞に載るようなお堅い事件にはあまり興味がなく、ドラマやバラエティ番組を見ているのだが。

「お兄ちゃん……」

「ん？ だいま。フェイト」

フェイトが正式に義妹いもつとになった頃は「お兄ちゃん」と呼ばれるのは恥ずかしかったが、大分慣れてきた。以前のように、呼ばれただけで顔が赤くなるような事はない。

挨拶をした後すぐ新聞に目を戻したが、何か違和感がある。もう一度フェイトの方を向くと、涙目で立っている事に気づいた。

「フェイト、どうしたんだ。一体？」

フェイトがクロノに寄ってきて、膝すかに縋り付いて泣き始

めた。様子が尋常じゃない。

「あのね、膾が無かったの……」

「は？」

クロノはフェイトの口から発せられた言葉を直ぐに理解できなかった。

「さっき見てみたら、膾がなかったの……」

「……え」と、分かるように説明してくれないか？」

フェイトの口から発せられた意外で際どい単語と状態。直ぐに理解しろと言う方が無理だ。それにクロノは有能な執務官とはいえ、まだ十四歳の少年。その手の知識も経験も多くない。もつとも、例えクロノがもっと年齢が上だったとしても、義妹から「膾」と言う単語を言われたら慌てふためくだろうが。

「えとね、今日学校で保健体育の授業があったの。それで、女性には膾はって穴が開いてるって言われたから、自分にもあるか見てみたの」

「それで？」

「穴開いてなかったの……」

「なるほど」

クロノは状況を大体理解した。しかし、どうしたものか。「そう言う事は、母さんに相談した方が良いんじゃないか？」

「お母さん暫く帰って来ないじゃない」

二人の母親であるリンディ提督は長期の会議で出張中。通信も繋がりにくい。それにこういふ話題を通信で行うのは抵抗あるのだろう。それが義兄あにに話すよりも抵抗があるのだとは、とても思えないが。

「膣がないのって、やっぱり私が普通の人間じゃないから？」

「まだそんな事を言っているのか！」

フェイトは出自が普通の人間とは違う為、極端に「人間性」に拘こだわる嫌きらいがある。事ある毎に否定しているのだが、まだ自分で納得はしていないようだ。

「何度も言っているが、ちゃんと検査の結果では」

「膣があるかまで検査したの？」

「うく……」

生体スキャンをして、身体の構造はもちろんDNA情報まで検査している。膣などの生殖器官の有無や活性化具合まで検査しているはずだ。全て異常なしとの報告を受けているので、当然生殖器官にも異常は無いはずだ。しかし、本当にそこまで検査して異常がなかった、と説明できる程の自信はない。

「うん、見間違えなんて事はないのか？」

「じゃあ、お兄ちゃんが確かめてくれる？」

「ぶっ!! な! な! な! な! 何だっ!?」

クロノは思わず吹き出した。この様に言われて平常心を保てる程人間は出来ていない。

「そそそ、そう言う事は母さんに……」

「だから、出張……」

「う」

自分でも耳まで火照ほっている事をはっきりと感じ取れる。いや、脳みそまで沸騰している。今正常な判断を下す事は出来ない。

「お兄ちゃん、お願い」

「!?」

フェイトに上目遣いで頼まれて、断れる訳がない。

「分かった、確かめるだけだぞ」

「うん、ありがとう」

確かめる以外に何をするのか、冷静に考えるとおかしい言動でも、気にならない。

フェイトは立ち上がると、スカートの中に手を入れようとする。

「ちよつと待て! ここで確かめるのか!？」

「え? 駄目?」

ここはリビング。幾ら今家にいるのがクロノとフェイトの二人だけとはいえ、公共の部屋でそのような事をするのは抵抗がある。それに、いつ誰かが転移して来るとも限ら

ない。

「へ、部屋に行こう。ここだと誰かが転移してくるかも知れない」

「……そうだね」

クロノはため息をつく。義妹いもむとが出来るとこんな苦労もするものなのか。

3

先にフェイトが自分の部屋に入り、クロノがその後にく。ベッドの前まで行き、フェイトがスカートの中に手を入れる。

「あ……」

「どうした？」

「パンツ、さっき脱いだままだった」

「ぶっ！」

フェイトは自分に膣ちち穴が開いていないと勘違いしたショックで、パンツを穿くのを忘れ、リビングまで来ていた。つまり、クロノとはノーパンのまま話していた事となる。その事を想像して、クロノの顔がまた赤くなった。

「えっと……」

フェイトはベッドの縁ふちに腰掛けると、スカートの端を摘

んだ。

「じゃあ、お兄ちゃん、お願い……」

そう言つて、スカートを捲り、足を広げた。フェイトの女性器あちが顕あらわになり、クロノは息を呑んだ。女性器の外見はリンディ提督と一緒に風呂に入った時に見ていた筈だが、それは物心つく前の話。しかも実母。幾ら妹とはいえ、つい数ヶ月前まで赤の他人だったフェイトのそれとは訳が違ちがう。さらに、陰毛で覆われ、足も閉じていたリンディ提督のそれとは違い、無毛なので覆い隠すものは何もなく、足も広げて大事な部品パーツが眼前まへに晒さらされている。

ごくりと唾を飲み込むと、クロノはフェイトの股間を覗き込むように座り込んだ。今まで医学書レベルでしか見ていなかった外陰部を目の前にし、頭がくらくらしてくる。心臓も、過去のどんな事件の時よりも速く、強く動いている。

まだ未成熟だが、クリトリス・膣ちちなど、女性器を構成する部品は全てちゃんとある。特に小陰唇が未発達なので、その間にある膣口ちちぐちがはつきりと見える。クロノはその膣口を覗こうとするが、膣内部が固く閉じている為ために、「穴」の形状を成な成なしていない。

(そうか)

クロノは、何故フェイトが膣ちちが無いと騒いだのか理解できた。

「フェイト、緊張してるだろ。力を弛めてくれないか？」
「え？ どういうこと？」

「緊張して、力が入ってるから穴が塞がってるんだ。膣の筋肉を弛緩させると穴が開くよ」

フェイトは暫く考えると、「分かった」と返事をした。

「でもどうするの？ 膣の筋肉の弛め方なんて分かんない」
「それは僕にも分からないけど、リラックスして、お尻とかの穴を緩めるような感じにすれば良いんじゃないか？」
「分かった。やってみる」

フェイトの女性器がひくひくと動く。筋肉の弛め方を必死に模索しているようだ。そして、膣口の奥の肉が引き、空洞が少しだけ開いた。光が届かない為に真っ暗で何も見えないが、奥まで続いているのは分かる。

「穴が開いたよ」

「本当!? 本当に膣の穴があったの!？」

「ああ、本当だ」

そう言つて、クロノは部屋を見渡し、机の上の鏡を見つめる。それを持って来て、フェイトに手渡す。フェイトは自分でも膣穴がある事を確認すると、嬉し涙を流した。

「良かった、私にもちゃんと膣あったんだ……」

フェイトは、涙を拭きながら足を閉じ、スカートを下ろ

した。その様子を見て、クロノも安堵する。

「じゃあ、もういいな」

義妹の膣穴を確かめるといふ異常な体験をした直後、早くこの場を立ち去りたい。

「あ、待って」

「なんだ、まだあるのか？」

「お兄ちゃんのペニスも見せて」

「なっ!？」

「なっ! なっ! なっ! 今度は何を言い出すんだ!？」

「なのはも、アリサもすずかも皆ペニス見た事あるんだって。見た事無いの私だけだった」

「そんな事で引け目感じなくて良い! それに何で見た事あるんだ!？」

「お父さんやお兄ちゃんと一緒に風呂に入った時に見たんだって。私は両方いなかったから……」

確かに、その意味では一切ペニスを見た事無いのは不幸な身の上だ。

「それで、アリサがお兄ちゃんに見せて貰って」

(あいつは!)

「ねえ、お願い」

「でもな……」

「お兄ちゃん、さつき私の膣見たじゃない」

「それは君が『どうしても』って頼んだからじゃないか！」

「それでも、私だけ見せて、お兄ちゃんの見せてくれないのは不公平だよ」

「うっ」

嵌められた。いや、フェイトの事だから嵌めるつもりはなかったんだろうが、結果的に嵌められた形になった。

「分かった。見るだけだぞ」

「本当？ やったあ」

フェイトが手を合わせて喜ぶ。対照的にクロノは肩を落とす。兄とは、こういう苦労もするものだろうか？

クロノは座っているフェイトの前に行くと、ズボンのチャックを下ろした。手を入れ、自分の物を出そうとする。

「あれ？ ズボン下ろさないの？」

「なんだ、ペニスを見たいんじゃないのか？」

「ズボンとパンツ下ろさなくちゃ見れないじゃない」

「男は、チャック下ろすだけでペニスを取り出せるんだよ」

「そうなんだ。どうして？」

「トイレの時に楽だろ」

「へっ 便利なんだ。いいなあ、全部下ろさなくていいなんて」

そうやって、クロノはチャックからペニスを取り出す。

「へえ、これがペニスなんだ」

生まれて初めて見る男性器に、フェイトは目を輝かせた。身を乗り出してまじまじとクロノのペニスを見ている。好奇心や感動が主なのだろうが、恥ずかしくもあるらしく、フェイトの頬が赤い。色白なだけに、拡張した毛細血管の色が素直に表に現れている。

「ねえ、睾丸ってどれなの？ そこで精子を作るんでしょう？」

「せ……！」

クロノは、フェイトの口から「精子」と言う単語まで出てきた事にさらに戸惑う。

「睾丸はペニスの下に付いてるんだ」

「見えない。ねえ、やっぱりズボンも下ろして」

「……分かったよ」

ここまで来て抵抗するのも無意味だ。クロノは一旦ペニスを仕舞うと、ズボンとパンツを脱いで、下半身をさらけ出した。

「うわぁ……」

フェイトがさらに感嘆の声を上げる。さらによく見ようと、ベッドから降りてクニ膝き、顔を直前まで近づける。

クロノは、恥ずかしさに堪らず上を向く。

「凄い、毛むくじやら。あ、ここで精子が作られるなあ」
 フェイトは右から左から、しっかりとクロノの局部を観察する。その視姦状態に平静を保つ事が出来ず、じわじわと海綿体が充血していく。

「あ、ペニスが大きくなってきた。凄い、これが勃起って言っただよな？」

「なあ、もういいだろ。十分見たな」

視姦だけでも恥ずかしいが、義妹の眼前で勃起するという醜態を晒すなど、これ以上精神が耐えられない。

「まだ駄目。ねえ、触って良い？」

「な!? 駄目に決まってるだろう!!」

「良いでしょう?」

「!!」

そう言っつて、フェイトはクロノのペニスを触りだした。普段素直で従順なフェイトではない。性的好奇心はこつも人格を変える物なのか。

恥ずかしさだけでなく、フェイトの手による刺激が加わって、クロノの海綿体に血液がどんどん流れてくる。自分以外の、それも女兒の小さく柔らかい手に因る刺激はもちろん初めてだ。

「凄い。硬い。何が入ってるの?」

「……」

フェイトは筒を持って上下に扱いたり、強く握ったりして硬さを確かめたり、左右に揺らして、元の位置に戻るのを楽しんでいる。クロノは、刺激に耐えるのに必死で、フェイトの問いに答える事が出来ない。

クロノは顔を上げて歯を食いしばる。フェイトを突き飛ばせば、この責め苦から解放されるが、フェイトの刺激による快感を楽しむ感情もあり、それを許さない。

「ここから精子が出るんだ」

そう言っつて、フェイトはペニスの先端、亀頭に触れた。自分でマス掻きする時でも滅多に触らない場所への刺激が、限界を超えさせた。

「う……」

「キャッ!?!」

クロノは呻き声を上げ、思わず腰を引いた。それと同時に、尿道口から白い液体が吹き出る。その液はフェイトの眉間を直撃し、髪や部屋の床も汚した。突然起こった予期せぬ出来事に、フェイトは呆然としている。

「う、ごめん……」

「……これが『射精』って言うの?」

「そうだ」

クロノはとても気まずい顔をして答える。クロノが苦惱

している事を露にも思わず、フェイトは顔に付いた精液を拭^{ぬぐ}って、手に付いた白くてネバネバした液体をまじまじと見る。

「これが『精子』?」

「いや、これは精液で、中に精子が入ってるんだ。精子は小さくて目に見えない」

「そうなんだ」

精子は知ってても、精液は知らない。どういう性教育なんだろう?

「射精って、ペニスを膣の中に入れてたら起きるんじゃないの?」

「射精は、ペニスに刺激を与えると起きる。膣の中かどうかは関係ない」

「ふん。じゃあ、今お兄ちゃんは気持ち良かったって事?」

「何!？」

クロノは、突拍子のないフェイトの言動に未だに慣れない。

「ペニスを膣に入れると気持ち良くなって、一番気持ち良い時に射精するって、すずかが言ってた」

「……」

(あの娘も……)

アリサならまだ分かるが、すずかまで同類だとは思わな

かった。もしかして、地球の女の子は皆こうなのか? ク

ロノは、なのはもそうなんじゃないかと不安になる。

「ねえ、気持ちよかったの?」

そう言つて、フェイトはクロノに顔を近づける。

「そ、そんな事言える訳ないだろっ!!」

クロノはフェイトを突き飛ばさない程度に、押し返した。自分の精液でまみれた顔で迫られると、これ以上理性を保つ自信が無い。

「とにかく、フェイトにちゃんと膣があることも確認したし、ペニスも見せた! これまでだ!」

そう叫ぶと、クロノはドアに向かって身体を反転する。が、下ろしたズボンに足が絡まり、転んでしまう。剥き出しの男性器を床に擦^{こす}る。しかし、その物理的な痛みよりも、

下半身丸出しで転んでしまうと云う醜態を晒した、精神的痛みの方が大きかった。クロノはズボンを掴むと、そのまま部屋を出て行った。

「……ぶっ」

フェイトは不満だったが、これ以上クロノは答ええないだろうと諦める。

顔に何かが付いている感触が気になり、自分の膣を見るのに使った鏡で、今度は自分の顔を見してみる。

「うわ!」

精液はほぼ体温なので、あまり付いているという感触がない。予想よりも大量の精液が顔に付いていた。フェイトは、その一部を指で掬って嘗めてみる。

「……変な味」

かすかに苦いがほぼ無味。それでいてぶによぶによする歯触り。あまり美味しい物ではない。

フェイトは残りをティッシュで拭くと、お風呂に向かった。入浴しながら冷静になつて考えてみると、自分がかんでもなく恥ずかしい事をしていたと気づくのがあった。

4

翌日、いつもの四人組が集まっている。

「ねえ、フェイト。クロノ君にペニス見せて貰った？」

アリサが軽やかに質問する。明らかに「見せて貰ってない」と言う答えを期待し、からかおうとしている。

「う、うん。見せて貰ったよ……」

「……」

「……」

「……」

フェイト以外が状況を把握するのに約三秒。

「ええ〜っ!!」

状況を理解すると、皆一斉に声を上げた。

「まさか本当に見せて貰うとは思わなかった……」

「そんな、アリサが『見せて貰え』って言ったんだよ」

「だからって、本当に頼むなんて……ねえ」

「アリサちゃん。頼まなかったら、それだからかうつもりだったんでしょ」

「当然」

「……」

理不尽なことをさらりというアリサに、一同呆れた。

「でも、クロノ君も良く見せてくれたね」

「普通見せてくれないよね」

「お兄ちゃんも最初は断つただけど、お願いしたら見せてくれたの」

「それでも、ね」

「フェイトちゃん、まさかクロノさんの弱み握ってない？」

「そんな事、ないけど……」

自分の膣を見せたことが既に弱みになっていることに気づかない。

「そんな事より、クロノ君のペニスってどんなだったの？」

「どんなって？」

「だからあ、大きかったとか、小さかったとか、形とか」

「そんなの、他の男の人のペニス見たこと無いから分から

ないよ」

「そりゃそうか」

そして、またアリサが突拍子もないことを言い出した。

「じゃあ、私達が比べてあげようか」

「ええっ!？」

「それは……」

「さすがは恭也の物を見たことあるとは言え、そこまでの気はないようだ。」

「流石に私達には見せてくれないんじゃない？」

「なのだが、冷静に諭そうとする。」

「別にわざわざ頼まなくても、一緒にお風呂に入ろうって言えばいいじゃない。今度またスーパー銭湯が出来たでしょ。そこは男女混浴だって」

「あの、そこは水着で入るんだけど……」

「え？ そうなの？ つまんない」

それからスーパー銭湯の話題で盛り上がり、クロノのペニスのこと忘れられていった。

第3章

1

フェイトとクロノが互いに性器を見せ合つたという「事件」から数日が経った。二人の間は少し気まずくなったが、クロノの仕事が忙しくなり、家を空けがちになっていたので、どうにか過ごせていた。

そんなある日、フェイトは魔法を自習するために、クロノから魔導書を借りようと部屋に入る。トリプルエープラスAAA+クラス魔導師であるクロノの部屋には、様々な魔導書が置いてある。フェイトは、いつでも借りて良いと言われていた。

「あれ？ これ、地球の本だ」

魔導書が満載されているが、その中に地球の本屋のブックカバーを見つける。クロノは執務官の仕事が忙しく、めったに地球に居る事はない。それでも地球で暮すために、地球の文化を勉強しているようだ。

「へえ、どんな本読んでるんだろっ」

フェイトは、兄が地球のどの様な事を学ぼうとしているのか気になり、その本を手にとってみた。

「あ、絵がいっぱい。これ、漫画だ」

堅物かたぶつな兄も漫画を読んだと知って、フェイトは「くすり」と笑ってしまう。

考えてみれば、クロノも地球の文字は殆んど知らない筈だ。毎日学校で勉強しているフェイトでも、文字を覚えるのは苦労している。文字数も少なく、漢字には振り仮名が振ってある漫画は、手っ取り早く地球の文化を覚えるのに効率が良いのかもしれない。だとすると、合理的な考えをするクロノらしい。

パラパラと捲めくっていくうちに、段々と読みふける。どうやら学園恋愛物らしい。堅物な兄が恋愛物を読んだと知って、フェイトは再び笑ってしまう。読み進めていくと、何か変な事に気づいた。

（これ、兄妹で愛し合ってるの？）

そう、これは兄妹の禁断の恋を描いた物語だった。ミッドチルダでは兄妹の恋愛は禁忌きんぎである。地球ではそうではないのだろうか？ しかし、ストーリーは周りの反対を押しきって、愛を貫き通すと言う物のようだ。やはり、地球でも兄妹での恋愛は禁忌なのだ。

「あ……」

とうとう作中で二人は結ばれた。文字通り結ばれた。それまでのタッチとは打って変わって、濃厚な性交シーンが描かれている。

「凄い…… セックスって、こんななんだ」

初めて知るセックスの様子。それに伴う快感の様子。フェイトはただ読んでもただなのに、興奮して心臓や息が荒くなる。そして、集中して辺りの状況を感じなくなってしまう。

「なんだ、僕の部屋にいたのか」

仕事から戻って来たクロノが、自分の部屋に戻る。そこに魔導書 とクロノは思っている を読み耽^{ひび}っている フェイトを見つけた。

クロノが部屋に入っても、フェイトは気づく様子はない。その集中力^にクロノは感心する。

（流石はフェイト、凄い集中力だ。でも、こんな時に敵に教われたらアウトだな）

集中力があり過ぎるのも考え物だ。しかし、それはここが安心して集中できる場所だと言うことを意味する。それはとても幸せなことかもしれない。

「フェイト」

フェイトは呼び掛けても反応しない。

「フェイト！」

「キャアアツ!!」

クロノはフェイトの肩を揺する。流石にフェイトも気づいたようだが、あり得ないくらい悲鳴を上げる。そして急いでクロノから離れると、さっきまで読んでいた本を後ろに隠した。

「なんだ、何をそんなに驚いてるんだ？ 別に魔導書はいつでも借りて良いって言うてるだろう」

クロノは、フェイトの動揺がただの動揺ではないことに気づく。それに、フェイトの顔が耳まで真っ赤だ。

「う、うんそうだよ。じゃあ、これ、借りてくね」

そう言うって、フェイトは本を後ろに隠したまま横移動しだす。魔導書に何を慌てて…… まさか！

「ちよつと待て！ フェイト！」

「え？ あ？ きゃあつ！」

クロノが本に手を伸ばそうとすると、慌てて体勢を崩したフェイトの手から、隠していた本が落ちた。クロノは急いでその本を拾う。

「み、見ちゃ駄目！」

「見ちゃ駄目って、これは僕の本だぞ」

そう言うって、本を開いた。やっぱり。

「僕は確かに魔導書は読んで良いとは言ったが、こんな本

まで読んで良いとは言っていないぞ」

「ご、ごめんなさい」

クロノは「こんな本」を所有・愛読していた事がバレて内心焦っていたが、その事を微塵も感じさせず、説教を開始する。この程度の焦りを表に出すようでは、執務官失格だ。とても犯罪者の取り調べなどできない。

「クロノが地球でどんな本を読んでいるのかな？　と調べて。まさかHな本だなんて知らなかったんだよ」

「ん、まあ、分かりやすい所に置いておいた僕も悪いか。今度からカバーがかかっている本は手に取らないように。魔導書ならカバーがかかっている本は無いから」

「はい……」

クロノは、逆に自分がエロ本を持っていた事を追求されるのを恐れ、簡単に済ませようとした。が、そつは問屋が卸さない。

「それで、お兄ちゃん。その本の内容なんだけど……」
(ぎく)

「その、セックスしてるの兄妹だよな」

「……」

クロノの額に脂汗あぶらあせが流れる。次の質問が予想できる。

「お兄ちゃん、私とセックスしたいって思ってるの？」

「やっぱり。予想通りの質問が来る。」

「そんなこと思ってるわけないだろ。これはあくまで、地球の文化を研究するためにだな」

「じゃあ、お兄ちゃんは私を愛してないの？」

「何!？」

「何でそうなる？」

「だって、この本って、愛し合ってるなら兄妹でもセックスする、ってお話でしょう？」

「そ、それはそうだが」

「愛し合うのに、ミッドチルダ式も地球式もないよね？」
「そうかもしれないけど、これはあくまでフィクションであってだな、兄妹ではセックスしないんだよ」

「ううん。だって私、これ読んでとっても感動したもん。」

「愛にフィクションも現実も無いよ」

「う……」

「私、お兄ちゃんの事愛してるもん。お兄ちゃんは違うの？」

クロノは段々不安を感じてくる。心理戦は何度もこなしてきたが、恋愛はした事無い。まして女の子に恋愛について議論して、納得させられるだろうか？

「フェイト、確かに僕は君を愛している。だけどそれは妹としてであって、恋愛としての愛じゃない」

「やっぱり愛してるんだね」

「だから」

「じゃあ、愛してないの？」

「うー」

そう言っつて、フェイトは涙目で訴える。

（駄目だ、今のフェイトはこの本に完全に毒されてる。ここは僕だけでも冷静さを保たないと）

クロノは、フェイトの目を見ないようにする。フェイトの涙目を見つけていたら、この間のように流されそつだ。

しかし、フェイトはクロノの両頬を掌で押え、正面を向かせる。そして、そのままつま先立ちになった。クロノは身長がそれ程高くない。フェイトは、難なく唇を重ねることができた。そのまま、フェイトは腕をクロノの首の後ろに廻す。

「んぐ……」

お互い初めてのキスは強烈だった。ディープキスという言葉も知らないフェイトは、舌を入れてくるような事はしてこない。だが、唇を重ね合せているというだけで十分刺激的だった。

クロノとフェイトは、腕力が全然違うのだから、押しつけようとすれば簡単にできた筈だった。だが、クロノはそのチャンスを失った。唇という性感帯が、段々と理性を崩し、劣情が増幅する。クロノもまた、段々と感情に流されていく。

そして二人は、ゆっくりと唇を離すと見つめ合う。

「本当にいいんだな？」

フェイトは無言で頷く。

「後悔はしないな」

再び頷く。

それを確認すると、今度はクロノの方から口づけをする。実体験は今回が初めてだが、今までエロ本を読んできた知識はある。舌を突き出し、フェイトの口の中にねじ込む。フェイトはその行為に驚いたのか、一瞬身体を震わせたが、拒否することなく受け入れる。クロノはそのままフェイトの舌を絡める。

暫くフェイトの口内を堪能したクロノは、ゆっくりと唇と身体を離す。フェイトの目は虚ろで、とろんとしている。全身から力が抜けているのか、崩れる身体を手を添えて支える。そのままクロノはフェイトの身体を抱き抱える。いわゆるお姫様抱っこをしながら、ベッドへと歩いて行き、ゆっくりと寝かせた。そしてそのままキスを続ける。

キスをしながら、クロノは自分のシャツのボタンを外していく。キスの場所もいつの間にか、唇から頬、耳、首筋へと移っていく。普段嘗められない場所を嘗められるたびに、フェイトの身体がピクピクと震える。

首筋まで行くと、服が邪魔になる。クロノは、フェイト

のTシャツを一気に脱がした。白い木綿の下着が目に入る。十歳の小学生らしい下着、当然胸は全くない。続けて下着を脱がせ、クロノも自分の上半身を脱ぐ。

クロノは、邪魔な布が取り払われた肌を再び嘗める。お互い上半身の間には遮る物は何もない。身体を密着して嘗めると、すべすべとした肌が直接触れあう。

嘗める箇所は、鎖骨を伝って乳首へ。胸の膨らみが無いので、揉む事は出来ない。しかし、乳首が敏感なのは大人と変わらない。未発達で小さな乳首を舌で転がす度に、フェイトの身体が突っ張り、痙攣し、可愛い喘ぎ声もが漏れる。

乳首を十分に堪能すると、再び攻めるポイントを移動させる。腹部に移動して愛撫を続ける。刺激を与える度に腹筋が激しく痙攣する。腹筋が激しく動く為に、フェイトの呼吸もおかしくなり、喘ぎ声に力が籠こもる。

クロノがさらに下に移動しようとする、再び邪魔な布が現れた。スカートのホックを外し、脱がす。そこには白い逆三角形の布がある。先日、お互い性器を見せ合った時、フェイトはパンツを履き忘れていたので、フェイトのパンツを見るのは初めてになる。

クロノは、今度は即座に脱がすような無粋な真似はしなかった。ゆっくりと足を広げ、顔を近づける。布が楕円形に濡れているのが分かる。中心は、既に位置を知っている

臍口だ。その事を想像すると、クロノの物はさらに怒張どちようする。窮屈さに耐えられなくなり、先に自分のズボンとパンツを脱いだ。

そして、布越しにフェイトの敏感な部分に触れる。フェイトの身体がピクンと痙攣する。さらに触り続ける。フェイトの身体は痙攣し続け、可愛い悲鳴を漏らす。布の染みがさらに広がる。

「フェイト、パンツがぐしょぐしょだよ」

「ぐしょぐしょ？」

フェイトは臍臍もつろつとした意識で辛うじて答える。しかし、意味は分かってないようだ。

「自分で触ってみて」

そう言つて、クロノはフェイトの手を導いた。フェイトは、自分のパンツが濡れていることに驚く。

「あれ？ どうして？ おしっこ？」

フェイトは臍臍もつろつとしている間に、おもらしをしてしまったと勘違いした。

「違うよ。女の子は気持ち良くなると濡れてくるんだよ」「そうなんだ」

「だから、これだけ濡れてるって事は、フェイトがとても気持ち良くなってるって事なんだ」

「あっ」

そう言つて、フェイトの手を掴み、自分でパンツをなぞらせる。フェイトがまた可愛い声を上げる。そして、クロノはフェイトのパンツに手をかけ、引き下ろした。何も服をまとつていない、生まれたままの姿になる。いや、フェイトの場合は造られたままの姿と言つべきか。

クロノはフェイトの大陰唇に触れ、左右に広げる。前回はまだ眺めるだけだったが、今回は広げる為に、隠れて見えなかった部品までもがしっかりと見える。そのまま指をずらし、小陰唇に触れる。

「あっ!」

フェイトの身体が大きくびくつく。

「あっ! あっ! あっ!」

小陰唇をなぞる度にフェイトが喘ぎ声を上げる。指を上になぞらし、小陰唇の合わせ目にある突起を触る。

「ひあっ!!」

悲鳴とも言える叫びを上げるフェイト。敏感なクリトリスへの直接の刺激は、快感ではなく、むしろ苦痛を与えていた。そうとは気づかず、クロノはクリトリスを触り続ける。

「止めて…… お願い…… あっ!?!」

クリトリスからの痛みが無くなった次に、今まで全く味わったことのない感覚が起こる。何かが自分の身体の中に

入つて来ていた。

「何? ……これ?」

「ほら、触つてごらん」

そう言つて、クロノは左手でフェイトの指を導き、膣口に入れて指を触らせた。そして、フェイトの顔を上げさせ、股間が見えるようにする。

「僕の指が入つてるだろ」

「本当だ」

「ちゃんと穴が開いてるだろ」

「うん」

フェイトが頷くのを確認すると、クロノは指を抜いた。数日前の目視による確認ではなく、実際に穴に指を入れての確認は、フェイトに安堵感を与えた。

「今から、ペニスを膣に入れるよ」

フェイトはこくりと頷いたが、段々と緊張して来ているのが分かる。

「やっぱり止める?」

フェイトは首を振る。

「ううん」

「本当に後悔はしないな」

「どうして後悔するの？」

「……分かった」

クロノは自分の物に手を添え、先端をフェイトの膣口に宛^{あて}がう。その刺激と緊張から、フェイトの身体がまたびくつく。

二人とも息を飲み込むと、クロノはゆっくりと身体を進める。

「痛っ！」

フェイトが思わず逃げて、宛がったペニス離れた。

「あ、ごめんなさい」

「いいよ。やっぱり止める？」

「ううん、今度は逃げないから」

そういつて、フェイトはシーツをギュツと掴む。心構えをして緊張すると余計に痛みが増すのだが、そのような事は知るよしもない。

「行くよ」

そういつて、クロノは再びペニスを膣に押し込もうとする。本能的にフェイトの身体がずり上がるが、それを必死に耐えている。ズポツと言つ擬音が聞こえたような感覚があつた瞬間、クロノの亀頭が温かさに包まれた。

「入った」

「……そ、そう……」

フェイトは辛うじて同意できたが、痛みが激しくそれ処ではない。先端が納まったので、もう支持^{しじ}のためにペニスを握っておく必要はない。手を離し、フェイトを見つめ、腕は身体を支えるために使う。

「触ってみるか？」

「う、うん」

ゆっくりと手をペニスまで持つて行き、触れる。フェイトの狭い膣に固定され、ペニスはびくともしない。

「す、凄い。本当に入るんだ……」

クロノのペニスを握ると、男性器の太さをあらためて思い知る。それに対して膣口は、自分で見てみて穴が全然分からなかつたくらいの大ささしかない筈なのに。

「膣は柔軟性があるからね。だって、赤ちゃんが通れるくらいだから」

「赤ちゃん……」

その響きに不思議なものを感じる。人間の赤ちゃんは見たこと無い筈なのに、妙に愛おしさを感じるのは何故だろう？ 自分にも母性というものがあるのだろうか？

ピクリ。

「あ、今動いた」

結合しているので、クロノがペニスを動かす感覚を直^{じか}に感じ取れる。動く度に痛みが発生する。例え動かさなくても

も痛みは続いているが、その痛みは段々と引いて来ていた。

「今、私達セックスしてるんだよね」

「ああ、まだ最初だけだな」

「最初？」

セックスとは、ペニスを膣に入れて射精する事の筈だ。

まだ射精していない事を言っているのだろうか？

「まだ先っぽしか入ってないし、射精するためには動かし

たりしないといけない」

「先っぽ？」

「まだ三センチくらいしか入ってない。膣はもっと奥まであるんだ」

そう言えば、授業で出てきた断面図では十センチくらいありそうだった。それに、クロノのペニスも、外に結構長く残っている。今は段々と痛みが引いてきたが、奥まで入れるとまた痛くなるのだろうか？ でも！

「奥まで入れて良いよ」

「本当に？」

「うん。だって、まだセックス全部してないんでしょ？」

「よし」

クロノの身体が再び進み始めた。それと同時に、再び激痛が襲う。下半身が、めりめりと引き裂かれるようだ。

「ああっ！ あ！ く……」

溜まらず悲鳴を上げ、シーツを掴む。

「僕に掴まって」

激痛の中、クロノの言葉を膣おぼろげ気に理解すると、シーツを離してクロノに抱きつく。抱きついていると、安心感と一体感が生まれて来て、痛みが和らいでくる。むしろ痛みは、困難な事を成し遂げようとする充実感に変換される。

「うっ！」

「あうっ！」

ペニスの先端が子宮口まで辿り着く。クロノは亀頭にしこりが当たった事で、フェイトは身体の奥底に発生した、今までとは違った種類の痛みでその事を理解した。

「奥まで入ったよ……」

「うん、分かる……」

クロノは暫く動きを止める。急に動かしては、フェイトが可哀想だ。

「お兄ちゃんがいっぱい……」

自分の身体を押し広げる痛みは、クロノを受け入れている事の裏返し。フェイトも、クロノと一体となった感覚を味わっていた。

「ああ……」

クロノが動きを止めたと言っても、フェイトの暖かく、狭い膣内は、動かさずただ包まれているだけで快感が押し寄せてくる。オナニーの際の自分の手とは全く違う。クロノのペニスは、その快感に耐えられずピクピクと動く。口からも吐息が漏れる。

ピクピクと動く度に、固い子宮口がカリ首の上の方に当たる。ペニスの中でも、最も快感を生み出す場所の一つに刺激が来るようになっているとは、人間の身体は上手くできている。

クロノは、段々とその刺激をより強く受けたいと思うようになってきた。止めていた動きを再開する。ペニスを奥に沈めたまま小刻みに動き、亀頭に子宮口がコツコツと当たる。

「あ、痛い！」

処女膜の裂け目や、まだ濡れきっていない膣壁が擦れ、フェイトは再び激痛に悲鳴を上げた。さらには子宮という内臓への刺激もある。

「痛い！ お兄ちゃん、動かないで！」

「ごめん、フェイト」

クロノの快感が高まる。高まった快感は、より大きな快感を得ようとし、理性と気遣いを無くす。クロノは、フェイトの懇願を無視して動きを続ける。

「痛い！ 痛い！」

フェイトはクロノにしがみついて痛みを堪える。

「う、あ、あう」

「あうっ……」

クロノは動きを止めると、フェイトの奥の奥までペニスを沈めようとする。フェイトは子宮への圧迫感から、軽い吐き気を催す。その時、クロノのペニスがびくびくと脈動するのを感じた。

2

「ぐすん…… ひっく……」

「ごめん…… 痛くする気はなかったんだけど、止まらな

かったんだ」

「そうなの？」

「フェイトの中があまりに気持ちよくてさ」

「そうなんだ」

フェイトの顔がほころぶ。自分がクロノを気持ちよくさせたという事が嬉しいようだ。

「それと……」

「何？」

「ごめん、中に出した」

「中に出したって?」

「その、精液を」

「じゃあ、射精したんだ」

「ああ」

フェイトの顔が明るくなる。

「これで、セックスした事になるんだよね」

「そうだ」

「嬉しい。でも、どうして謝ったの?」

「だって、中に出したら妊娠するかも知れないじゃないか」

本当は中に出さなくても妊娠はするのだが、そこまでの知識はクロノにはない。

「妊娠? 赤ちゃんが出来る事?」

フェイトが怪訝な顔をする。

「セックスつて、赤ちゃんを作る為にするんじゃないの?」

「そうだけど、赤ちゃんが出来たら困るだろ」

「クロノは、赤ちゃん出来たら困るんだ」

フェイトの顔が暗くなつたのを、クロノは必死にフォローする。

「赤ちゃんを育てるってのは大変だし、それに兄妹で赤ちゃんを作ったら大騒ぎになる」

「……」

「それに、大人にならないで赤ちゃんを産もうとすると、

死ぬ事もあるんだ」

「え!? 赤ちゃん産むと死んじゃうの!?!」

「大人でも死ぬ事があるんだ。まだ身体が出来てない状態だと尚更だ。僕はフェイトが死ぬのなんて嫌だ」

「そうなんだ、ごめんなさい……」

「いいんだよ」

クロノは、フェイトを納得させると身体を起こす。

「じゃあ、もうそろそろ抜くよ」

「うん」

「また痛いかも知れないけど我慢して」

「いつ!」

そう言つて、クロノはゆっくりとペニスを引き抜く。出てきたペニスは、フェイトの愛液にまみれててかてか光っている。さらに、処女膜の破れた場所から出た血が幾筋が見える。抜き終わったペニスは、挿入前よりも細くなり、だらんと垂れている。

ペニスという栓が無くなった腔口から、赤と白のまだら模様の精液が流れ出る。

股間を何かが伝つた感触を感じ取つたフェイトが、身体を起こして確かめる。

「あ、精液が出てる。この間みたいに真っ白じゃないんだ」

「それは、血が混ざってるんだよ」

「血？ じゃあ、生理なの？」

「違う、処女膜が破れたんだ」

「あつ、そうか」

フェイトは、さすがが言っていた事を思い出した。

「じゃあ、次にセックスする時は痛くないかな？」

「まだ暫くは痛いけど、段々と痛くなくなつて、気持ちよくなるよ」

「そうなんだ。楽しみ」

フェイトが笑うと、腹筋に力が入り、さらに精液が流れ出た。

「いっぱい出るんだね。本当に子宮の中に入ったのかな？」

「うん、入ってなさそうだ」

普段のオナニーで、一回の射精で出る精液の量は分かっている。それに匹敵する量が膣から溢れ出ていた。

「それで妊娠できるのかな？」

「うん。出来ると思うけど……」

流石にクロノも答えられない領域に入ってきた。

「うわ、何するんだ!？」

フェイトが、クロノのペニスを握ってきた。射精直後の敏感なペニスを触られて、クロノの腰が引く。しかし、愛液や精液にまみれ、ぬるぬるとした状態で触られるのは、乾いた状態で触られた時以上に気持ちいい。

「これがさっきまで入ってたんだね」

「フェイト、止める」

クロノはフェイトの肩を掴むが、フェイトは止めようとしなない。

「あ、また大きくなってきた」

クロノももう止めない。自分のペニスが再び大きく、固くなるに従い、またフェイトに挿入したくなってきた。

「フェイト、また入れて良いかい？」

「え？ またセックスするの？」

「だって、ほら」

そう言つて、再び勃起しているペニスを指す。

「こんな風にしたのは君だろ？」

「……分かった」

自分がいじつた責任を感じて、フェイトは応じた。再び仰向けに寝転がる。

「あ、今度はうつ伏せになつてくれないか？」

「うつ伏せ？」

フェイトは、訝しがりながらも素直に従う。今度は何をされるのか心配になつて、クロノを見ている。クロノは微笑むと、お尻に目をやる。スレンダーな上、第二次成長前であり肉の付いていないお尻が可愛い。クロノが触るとキュツと絞まる。

背中に顔を近づけ、舌で背骨のラインを伝わせる。フェイトの身体がビクビクと震える。そのまま首筋を嘗め、耳たぶを甘噛みし、フェイトの可愛い声を堪能する。

フェイトがたくたになつた処で、クロノはお尻を引き上げた。そして、後ろから宛がうと、今度は一気に挿入した。

「ああっ！」

「今度はどうだい？」

「さつきより痛く… あっ！」

フェイトが答え終るのを待たずに再び突く。一回目は奥の方で細かく動かしていたが、今度は大きく出し入れする。フェイトのお尻がパンパンと音を立てる。

「痛い… お兄ちゃん痛い… もっとゆっくり…」

フェイトの懇願を受け、大きく動かしていたピストンを、細かく刻むようにする。それと共に段々と身体を倒し、再びうつ伏せにさせる。フェイトの肩を持ち、しっかりと抱きしめる。フェイトの横顔が柔らかくなった。

「フェイト、また行きそうだ」

「行く？」

「射精… うー！」

ぐびゅっ。ぐびゅっ！

フェイトの中に再び精が注ぎ込まれる。フェイトもそれ

を感じ取り、吐息を漏らす。

「また射精したんだね」

「分かるんだ」

「だって、ペニスがピクピク動くんだもん」

「……」

「じゃあ、また膣の中精液でいっぱいなんだ」

「ああ、そうだ」

お互い微笑み合う。精液だけでなく、幸せもいっぱいを感じ取っていた。

クロノがペニスを引き抜いて離れようとする、フェイトがそれを止めた。

「待って、抜かないで」

「どうしたんだ？」

「さつきペニスが抜かれた時、なんかぼっかり穴が開いたみたいで寂しかったの。暫くこのままでいて」

「……分かった」

クロノは苦笑するも、言う通りにした。しかし、このままに乗ったままではお互い辛い。クロノは、ペニスが抜けないように注意しながら、身体を九十度ずらし、横向きになる。抜けないように足を曲げていると、丸まった

フェイトを全身で包み込むような形になった。右腕を枕をし、左腕をそつとフェイトに載せると、フェイトもその腕を抱きしめる。

お互いを愛おしく感じながら、二人はそのまま眠りについた。

3

「ごめんなさい！ 寝坊しました!!」

フェイトが教室のドアを勢い良く開けた。クラスの皆が一斉にフェイトを注視する。走ってきた事と、遅刻したこと、さらに注目されたことでフェイトは真っ赤だ。遅刻したことを笑う声と、真面目なフェイトが遅刻したことを不思議がる声が混ざる。

「テストロツタさんが遅刻するなんて、珍しいわね。早く席に着いて」

「はい……」

フェイトは息を切らしながら席に着いた。

休み時間になると、なのは達が寄って来た。

「フェイトちゃん、どうしたの？ 今日」

「日直だったから、てつきり先に行ったと思ってたよ。体調でも悪いの？」

「ううん、何でもない。昨日夜更かししちゃって」

「めえ、珍しい。何してたの？」

「え!？」

フェイトの顔が赤くなる。

「何もしてないよ。えと、本、魔導書を読んでたら止まらなくなっちゃって」

「ふうん。何か怪しいなあ。まあ、良いわ。昼休みゆっく

り訊くから」

「あ、ははは……」

昼休み、フェイトは屋上へ連行された。お弁当を食べる場所は普段教室だったり、屋上だったりまちまちだったが、今日は周りに誰もいない場所が選ばれた。

「さて、白状しなさい！ 昨日の夜何をしてたか!」

「だから、魔導書を読んでただけだって」

「ふん」

アリサはフェイトの言うことを全く信じていない。

「あっ!」

アリサがフェイトの弁当箱からオカズを摘まむと、口の

中に入れた。

「フエイトが嘘を吐くとオカズが減って行きます」

「そんなあ」

フエイトがこれ以上盗られまいと、オカズに箸を付けると、それも阻止されてアリサの口の中に入った。

「先に食べてしまえば良いなんて、姑息な考えは通用しません」

「ぶう。今日朝ごはん食べてないのに……」

フエイトはむくれるが、やましい事があるフエイトは強く反論できない。

「まあ、まあ、アリサちゃん。フエイトちゃんにだって言いたくない事の一つや二つはあるよ」

「なのは♡」

助け船を出されて、フエイトの顔が明るくなる。

「そうそう。女の子は秘密を持って大人になるのよ」

「さすがに助け船を出された筈だが、何か引掛かるのは何故だろうか？」

「この話はもう止めましょう。話題を変えて。そうだ、最近クロノさんと会ってないけど、元気？」

「え!? あ、元気だよ!」

いきなりクロノの事を訊かれて動揺する。何故ここにクロノが出てくるのか？

「なんか怪しいなあ。クロノ君と何かあったの?」

「え!? 何も無い!! 何も無いよ!!」

フエイトが必死になって否定する。その必死さと、顔が真っ赤になっていいることから、何かあったのは明らかだ。

「そう言えば、こないだクロノ君にペニス見せて貰ったって言ってたよね。まさかその先まで行っちゃったなんて事ない?」

「そ、その先……」

フエイトは「その先に行く」と言う言葉の意味は分からなかったが、何となく、クロノとセックスしたことが当てはまるような気がした。その事を思い出すと、顔が赤くなる。

「あゝフエイト赤くなった!! 吐きなさい! 正直に言うのよ!」

アリサがフエイトの首を掴んで揺する。

「く、苦しい」

「アリサちゃん、首絞まってる」

「げほ、げほ……」

アリサは仕方なく首を離すが、目は睨みを効かせたままだ。

「クロノ君とキスしたとか?」

「え?」

「クロノ君のペニスを触ったとか?」

「え？ え？」

段々確信に近づいてくる。もっとも、それらの行為もしたのだけれど。

「クロノ君のペニスを嘗めたとか？」

「ペニスを嘗めるの？」

「そ、フェラチオって言ってね」

「男の人は気持ち良いらしいわよ」

「へへ。今度やってみよう」

「……」

「……」

「!？」

フェイトが、しまったと口を押える。しかし、時既に遅し。アリサがフェイトに近寄り、首に腕を絡めて、耳元で囁く。

「フェイトはクロノ君とそう言う仲なんだ」

「え、えと……」

「どこまで行ったの？ 正直に話せば楽になるわよ」

そういつて、フェイトの頬を指で突つつく。フェイトは観念して答える。

「その、セックスしちゃった」

「……」

「……」

「えへっ!!」

暫くの沈黙の後、なのはが校庭の端まで聞こえそうなくらい大声で叫ぶ。すずかは、にこにここと笑って、内心何を考えているのか分からない。アリサはフェイトから離れると、フラフラと数歩歩いた後、ガックリと四つん這いになつて頂垂れた。

「フェイトに先を越されるなんて…… 奥手だと思つてたのに……」

アリサがぶつぶつと言っているのを気にせず、すずかが質問する。

「それで、どうだったの？ 初めてのHは？」

「えと、痛かった、かな？ でもお兄ちゃん優しくしてくれてね」

「そんな、フェイトちゃんとクロノ君が……」

「あ、なのは、この事皆には黙つといてね。恥ずかしいから」

「う…… うん」

(恥ずかしいことだけが問題なんだ……)

「あれ、アリサちゃんどうしたの？」

「ぶつぶつ言っていたアリサが、ようやく立ち上がる。」

「フェイトばかりズルイ……」

「え？」

「私にもクロノ君を貸しなさい！」

そう言つて、フェイトの胸ぐらを掴んだ。

「え？ え？ え？」

「アリサちゃん、駄目だよ、そんな……」

今度は、なのはの胸ぐらを掴む。

「恭也さんでもいいわ！」

「え〜っ！」

アリサの剣幕は、昼休み終了のチャイムが鳴った事も気づかない程で、午後の授業に遅刻した四人は、こつてり絞られることになった。

あとがき

皆さんこんにちは。PARALLEL ACT 主催者 TomOne です。つたない本を手にとってくださってありがとうございます。

イベント前日です。と言うか、日付変わってます。ヤバいです。時間無いです。

今回、表紙絵もなくてみました。と言うか、描く時間ありません(笑) でも自分の下手な絵を載せるより、よっぽど良いんじゃないかと。

夏コミは、男性向けなのはに配置されました。中央通路前です。目の前羊羹です。緩衝剤です(爆)

でも、新刊は『かしまし』の予定です。申し訳ありません。

ん。いや、なのはって、百合でしょ(笑) この本ノーマルカプだけ。それはともかく、『かしまし』も好きで書きたいし、夏コミ過ぎたらマリみてオンリーやなのはオンリーなので、『かしまし』発表できるタイミングが夏コミしかないのだ。

次のイベントは、夏コミ10月のとらはオンリーに、10月の『マリみて』オンリーです。11月のなのはオンリーは、おそらく申し込むと思います。

それでは、面白い本を用意しておきたいと思っております。よろしくお願いします。

’06年7月1日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』の同人誌を発表する。

人間の条件

PARALLEL ACT SERIES

2006年 7月2日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>

E-Mail tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

